様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 ２２ 年 ６ 月 １ 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０８３００６０
研究課題名（和文）
昭和戦前期における高等師範学校附属小学校の歴史教育実践に関する実証的研究
研究課題名（英文）
A positive study about the practices of history education in the elementary school attached to the higher normal school before World War II
研究代表者
福田 喜彦（FUKUDA YOSHIHIKO）
愛媛大学・教育学部・講師
研究者番号：30510888

研究成果の概要（和文）：

本研究では，歴史教育の戦前と戦後の教育論や授業論レベルでの「継承」と「断絶」とはどのようなものであったのかという問題意識のもとに，昭和戦前期の歴史教育の理論と実践を初等教育段階の歴史授業を対象に，歴史教育雑誌の教育実践に基づく実証的な分析を行った。それによって，高等師範学校附属小学校の歴史教育論を「説話主義」「理会主義」「作業主義」「合科主義」の４つに類型化し，その歴史教育実践に見られる特質と限界を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

This study analyzed the theory and practices of the history education based on the educational practices of the history education magazine before World WarⅡ. In particular, I focused on the history lesson of the elementary course stage. There was the location of the problem how was the prewar "succession" and the postwar "break" by the theory and practices of the history education. I thought about the characteristic of history education theory in the elementary school attached to the higher normal school. As a result, I was able to divide it into four types. It was "the principle of narration", "the principle of understanding", "the principle of work", "the principle of integrated curriculum". Thereby, It was able to clarify the characteristics and the limitations of the practices of history education in the elementary school attached to the higher normal school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,230,000	369,000	1,599,000
２００９年度	1,170,000	351,000	1,521,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：歴史教育実践，高等師範学校附属小学校，歴史教育雑誌，昭和戦前期

１．研究開始当初の背景

本研究では，1920 年代から 1940 年代にかけての歴史教育の理論と実践を類型化し，その特質と限界を明らかにすることを試みた。昭和戦前期の歴史教育実践については，大正自由教育の教科教育改革が収束していき，総力戦体制が確立していく中で，皇国史観に基づく歴史教育によって国民を国家主義的な教育のもとに収斂させる役割を果たしたものとして，描かれることが多かった。また，戦後の教育改革では，戦前の軍国主義的な教育を推進した皇国史観に基づく歴史教育を解体することから始まり，民主的な社会を形成していくための教科として「社会科」が誕生したとされている。このように昭和戦前期の歴史教育論は，戦前・戦後という二項対立的な分析枠組みの中で，否定的な評価を受けつつ，その授業論については国家主義的な教育論の枠組みでしか分析されることがなかった。そこで，従来の研究が「教科書」や「教授要目」の分析だけに止まっていたのに対して，教育雑誌を用いた歴史教育史研究から当時の代表的な歴史教育論の体系化を進めた。

２．研究の目的

本研究の目的は，昭和戦前期における高等師範学校附属小学校の歴史教育の理論と実践を類型化し，その意義と特質を実証的に明らかにすることである。

では，大正自由教育と戦後教育との転換期にあたる昭和戦前期においては，大正自由教育の課題はどのように受容され，どのような理論に基づいて歴史教育の実践が展開されたのであろうか。また，その教育理論や授業実践はどのように原理的に転換し，戦後教育にどのような課題を残すことになったのであろうか。先行研究においては，昭和戦前期の歴史教育の原理や方法がどのようなものであったのかを授業論のレベルで実証的に解明した研究は見られない。大正自由教育期から戦後期までの歴史教育史を連続的に捉える視点とはどのようなものだろうか。

そこで，本研究では，歴史教育の戦前と戦後の教育論や授業論レベルでの継承と断絶とはどのようなものであったのかという問題意識のもとに，初等教育段階の歴史授業を対象として昭和戦前期の歴史教育の理論と実践を教育雑誌の記録に基づいて実証的に分析した。それによって，高等師範学校附属小学校の歴史教育論を「説話主義」「理会主義」「作業主義」「合科主義」の４つの視点で類型化しながら，各高等師範学校附属小学校の歴史教育の理論と実践に見られるその意義と特質を検討した。

３．研究の方法

（1）研究の対象

本研究における歴史教育論の分析対象は，昭和戦前期の初等教育段階での授業論に焦点を当て，歴史教育改革の代表的実践校であった東京高等師範学校附属小学校，広島高等師範学校附属小学校，東京女子高等師範学校附属小学校，奈良女子高等師範学校附属小学校の４つの高等師範学校附属小学校の歴史教育実践を教科教育学的なアプローチから考察した。

これら４つの高等師範学校附属小学校は，近代以降，初等教育制度が確立していく過程で各教科教育の領域において初等教育の理論と実践の改革に先進的な取り組みを行い，各種の授業研究会や講習会を開催して全国各地から多くの参観者を集めていた。さらに，各校の独自の機関誌を発行して，国定教科書の分析や新たな教育実践の開発と普及に努めていた。本研究で研究対象とした 1920 年代から 1930 年代の高等師範学校附属小学校の教育研究の概略については以下のようである。

1873（明治６）年に開校した東京高等師範学校附属小学校は，明治期から続く初等教育研究のパイオニア的存在であった。直観教授による「開発主義」教授理論からヘルバルト派教育学に代表される「ヘルバルト主義」教授理論へと至る同校の教育実践は，初等教育の理論と実践において指導的な役割を果たすものであった。同校の主事であった佐々木秀一は，東京高等師範学校の教授として修身教授法を講じ，教育方法学についても積極的に提言を行っていた。同校の各教科の訓導たちが担当執筆した『細目式各科教育要項』『細目式各科指導書』などは，同校の教育実践の成果を示す一例である。

1905（明治 38）年に開校した広島高等師範学校附属小学校では，ドイツの精神科学の影響を受け，ディルタイらの教育哲学を同校の教育実践の中に組み入れていた。同校の主事であった佐藤熊治郎は，広島高等師範学校の教授として精神科学学会に参加し，同会の機関誌『精神科学』に自らの教育理論を展開していた。佐藤は，自発性の原理を自らの教育理論として主張する一方，郷土教育や勤労教育をはじめとして，国語・修身・歴史など各

教科の教授についても関心を寄せ，国民教育の中心問題を取り上げた著作を刊行していた。同校の各教科の訓導たちが担当執筆した『教育教授叢書』『各教科の自己法則性と教授の要諦叢書』『我等の教科経営』などは，同校の教育実践の成果を示す一例である。

1908（明治 41）年に開校した東京女子高等師範学校附属小学校の初等教育の理論と実践の画期となったのは主事である北澤種一により作業教育の理論と実践が導入されたことである。東京女子高等師範学校の教授でもあった北澤は，欧米留学から帰国後，作業教育の原理を同校での各教科教育の理論と実践に取り入れた。同校の訓導たちは，各教科教育での専門性を生かしながら，北澤の理論を自らの教科教育で実践し，授業改革を進めていった。同校の各教科の訓導たちが担当執筆した『解り易い作業教育叢書』『現代作業教育』『作業教育学芸会の新経営』などは，同校の教育実践の成果を示す一例である。

大正自由教育期には，全国各地で新教育運動の影響を受けた多様な初等教育実践が展開された。そのうちの一つに， 1911（明治44）年に開校した奈良女子高等師範学校附属小学校がある。同校は，木下竹次が主事として合科学習を実践したことで知られる。奈良女子高等師範学校の教授でもあった木下の合科学習の原理は，「独自学習」と「相互学習」を基盤とする「学習法」による児童の自律的学習であった。これらの教育実践は，画一的な一斉教授を打破する自学学習の中心的理論として大正自由教育期に注目を集めた。同校の訓導たちは，木下の合科学習の理論を各教科教育の実践に取り入れるだけでなく，学級経営や低学年教育などに各教科の枠組みにとらわれない授業実践を行い，各訓導たちが数多くの論考や著作を残すなどめざましい活躍を遂げていった。同校の各教科の訓導たちが担当執筆した各学年の『学級・学校経営』や『教科教育』に関する著作などは，同校の教育実践の成果を示す一例である。

（２）分析の方法

本研究では，高等師範学校附属小学校の機関誌として発行された４つの教育雑誌を取り上げて，実証的に研究を進めた。本研究でこれらの教育雑誌を活用する史料的な価値とその意義は以下の２点である。

第一に，授業実践に関しては，初等教育研究会の『教育研究』（東京高等師範学校附属小学校），学校教育研究会の『学校教育』（広島高等師範学校附属小学校），児童教育研究会の『児童教育』（東京女子高等師範学校附属小学校），学習研究会の『学習研究』（奈良女子高等師範学校附属小学校）といった各高等師範学校附属小学校の機関誌を中心としながら，各高等師範学校附属小学校の訓導たちによって歴史教育に関する理論と実践がどのように論じられていたのかを実証的に明らかにできる点である。

第二に，分析方法に関しては，これまで筆者が研究を進めてきた歴史教育研究会の『研究評論歴史教育』，国史教育研究会の『国史教育』，国史教育学会の『最新史観国史教育』，国史研究会の『実践国史教育』，地理歴史教育研究会の『地理歴史教育』の５つの歴史教育雑誌を駆使することで昭和戦前期の歴史教育論の全体的な動向を踏まえつつ，各高等師範学校附属小学校の訓導たちの歴史教育の理論と実践の位置づけを明らかにできる点である。

これまでの研究において，上記で指摘したような教育雑誌を総合的に取り上げて分析した歴史教育研究は見られない。また，昭和戦前期における４つの高等師範学校附属小学校の実践は，大正自由教育期の理論と実践を生かしながら，これらの高等師範学校附属小学校が中心となって展開した教育雑誌，授業研究会，講習会など様々な機会を通じて，多くの小学校教師の理論と実践に影響を及ぼしたものの，歴史教育については，教科教育学的なアプローチよる体系的な分析はなされていない。

しかし，前述のように 1920 年から 1930 年代にかけて，東京高等師範学校附属小学校，広島高等師範学校附属小学校，東京女子高等師範学校附属小学校，奈良女子高等師範学校附属小学校の４つの高等師範学校附属小学校は，各校の主事による理論的な指導のもとで特色ある歴史授業を実践していた。特に，各高等師範学校附属小学校の歴史教育の中心的な役割を果たしたのが本研究で取り上げる山田義直（東京高等師範学校附属小学校），大久保馨（広島高等師範学校附属小学校），飛松正（東京女子高等師範学校附属小学校），大松庄太郎（奈良女子高等師範学校附属小学校）の各訓導たちである。これらの訓導たちは，各校の機関誌に自らの歴史教育の理論と実践を掲載し，それらをもとにした著作を数多く刊行していた。

そこで，本研究では，各高等師範学校附属小学校の訓導たちの歴史教育の理論と実践に基づきながら，以下の手順で考察した。第一に，これまでの「教科書」「教授要目」レベルの研究に留まらず，『教育研究』『学校教育』『児童教育』『学習研究』の各機関誌に発表された各訓導たちの代表的な論考から「授業実践」レベルにまで深化させた分析を行った。第二に，昭和戦前期における４つの高等師範学校附属小学校での歴史教育の理論と実践を「説話主義」「理解主義」「作業主義」「合科主義」といった各歴史授業実践に見られる特色から類型化した。第三に，各高等師

範学校附属小学校での歴史授業の内容や構成の意義と特質を明らかにした。

４．研究成果

本研究では，昭和戦前期における初等教育段階の歴史教育の理論と実践を東京高等師範学校附属小学校，広島高等師範学校附属小学校，東京女子高等師範学校附属小学校，奈良女子高等師範学校附属小学校の４つの高等師範学校附属小学校によって刊行された各教育雑誌から考察し，その特色を検討してきた。本研究のオリジナルな研究の成果は，以下の２つの点に集約される。

第一に，各高等師範学校附属小学校の国史科の訓導たちの歴史授業実践を各校の機関誌である『教育研究』『学校教育』『児童教育』『学習研究』という４つの教育雑誌を中心に検討した点である。本研究では，「教材構成の論理」「授業の指導過程」「児童の学習活動」といった３つの視点を用いた教科教育学的なアプローチによって，その歴史教育の理論と実践を比較・分析した。その結果，各高等師範学校附属小学校の歴史教育論を「説話主義」「理会主義」「作業主義」「合科主義」の４つの視点から類型化することができた。

第二に，歴史教育の戦前と戦後の教育論や授業論レベルでの継承と断絶とはどのようなものであったのかという問題意識のもとで大正自由教育期から戦後期までの歴史教育史を連続的に捉える視点を得ようと試みた点である。そのため，本研究では，昭和戦前期の歴史教育の理論と実践を上記の各教育雑誌の記録に基づく実証的な分析を行うことによって，初等教育段階での歴史授業構成論を考察した。その結果，戦後の「社会科歴史」へとつながる歴史教育実践上の特色を見いだすことができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①福田喜彦「広島高等師範学校附属小学校の理会主義歴史教育論－大久保馨の理論と実践をもとにして－」『教育方法学研究』第 35 号，2010 年，印刷中。
②福田喜彦「東京高等師範学校附属小学校の説話主義歴史教育論―山田義直の理論と実践を事例にして―」『日本教科教育学会誌』第 32 巻 2 号，2009 年，59-68 頁。
③福田喜彦「東京高等師範学校附属小学校の説話主義歴史教育論―山田義直の理論と実践を事例にして―」『日本社会科教育学会全国大会発表論文集』第 5 集，2009 年，28-29 頁。
④福田喜彦「昭和初期における奈良女子高等師範学校附属小学校の合科主義歴史教育論－大松庄太郎の理論と実践を手がかりにして－」『社会系教科教育学研究』第 20 号，2008 年，81-90 頁。
⑤福田喜彦「広島高等師範学校附属小学校の理解主義歴史教育論－大久保馨の理論と実践をもとにして－」『日本社会科教育学会全国大会発表論文集』第 4 集，2008 年，36-37 頁。

〔学会発表〕（計２件）

①福田喜彦「東京高等師範学校附属小学校の説話主義歴史教育論―山田義直の理論と実践を事例にして―」日本社会科教育学会，2009 年 11 月 22 日，香川大学。
②福田喜彦「広島高等師範学校附属小学校の理解主義歴史教育論－大久保馨の理論と実践をもとにして－」日本社会科教育学会，2008 年 10 月 11 日，滋賀大学。

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

福田　喜彦（FUKUDA YOSHIHIKO）
愛媛大学・教育学部・講師
研究者番号：30510888

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし